

正五位下大學博士守部連大隅 一首【年七十三】

五言侍_レ宴_ニ

聖_ニ 衿_シ 愛_シ 韶_ニ 韶_ニ 景_ヲ
山_ニ 水_ヲ 翫_フ 芳_ニ 春_ヲ
椒_ト 花_ヲ 帶_レ 風_ヲ 散_シ
柏_ニ 葉_ヲ 含_レ 月_ヲ 新_ニ
冬_ニ 花_ヲ 銷_キ 雪_ニ 嶺_ニ
寒_ニ 鏡_ヲ 泮_ト 氷_ニ 津_ニ
幸_ニ 陪_シ 濫_シ 吹_レ 席_ニ
還_テ 笑_フ 擊_ク 壤_ニ 民_ニ

椒_ハ花_ハは和名「イタハジカミ」なり。『晉書』列女傳に、劉臻妻陳氏。聰辨能_ク屬_ル
レ文。嘗_テ正旦獻_ス椒花頌。新年の祝詞なり、柏_ハ葉_ハも祝事に用ふ、柏葉酒は新年に飲
む酒、屠蘇と同じ。冬_ハ花_ハは雪、寒_ハ鏡_ハは氷。氷は凍を解き、雪は色銷ゆ。濫_ハ吹_ハ席_ハ、笙
歌管弦の席。此の如き席に坐して見れば、懽樂極る。上古擊_ク壤_ニ民_ニの樂は笑ふべし
となり。此の詩新年の氣分を見れば充分なり。巧拙何ぞ論ずるに足らん。

正五位下圖書頭吉田連宜 二首【年七十】

五言秋日於長王宅宴新羅客賦得秋字

西使言歸日
南登餞送秋
人隨蜀星遠
驂帶斷雲浮
一去殊鄉國
萬里絕風牛
未盡新知趣
還作飛乖愁

秋日は登高以て節を祝し、又客を送るの秋。南山に登り、以て西使の歸を送る意味。南登の義知り易し。蜀星遠、意義未詳。驂は歸驂、飄飄去るの寂寥味を言ふ。風牛、風馬牛、相及ばざる意。今日會ひ今日別る、十分に趣を盡さず。忽ちに飛乖の新愁を作す。

五言從駕吉野宮

神居深亦靜
勝地寂復幽
雲卷三舟谷
霞開八石洲
葉黃初送夏
桂白早迎秋
今日夢淵淵
遺響千年流

深と静と寂と幽、吉野宮を愛して、行幸屢ばし玉ふ所以なり。三舟谷、八石洲、
吉野の一名勝ならんむ、今日此の地名無し。夢淵淵は古溪案ず、夢の和太。俗呼
ニ梅回ニ是れならん。

外從五位下大學頭箭集宿禰蟲麻呂 二首

五言侍レ讌_ニ

聖 豫 開_キ 芳 京_ヨ
皇 恩 施_ス 品 生_ニ
流 霞 酒 處_ニ 泛
薰 吹 曲 中_ニ 輕
紫 殿 連 珠 絡_ヒ
丹 墀 萇_ベ 草 榮
卽 此 乘 槎 客
俱 欣 天 上_ノ 情

豫は樂_{たのしみ}と同じ。天皇が芳亭に會して、以て羣臣と飲燕し玉ふを豫_{たのしみ}なり。流霞、春の氣分は酒杯を持する處に於て泛ぶ。薰吹は一曲一曲に輕し。紫殿には連珠絡ひ、丹墀には萇草榮ゆ。萇は堯の時生じたりと云ふ奇瑞の草。卽此乘槎客、新羅の客が所謂燕に侍せしならん。故に乘槎の文字あり。我等臣下等と共に天皇の歡情を欣ぶとなり。

五言於_テ左僕射長王宅_ニ宴_ス

靈 臺 披_キ 廣 宴_ヲ
寶 罍_カ 歡_フ 琴 書_ヲ
趙 發_シ 青 鸞_ノ 舞_ヲ
夏 踊_{ラス} 赤 鱗_ノ 魚
柳 條 未_レ 吐_レ 綠
梅 蕊 已_ニ 芳 裾
卽 是 忘_ル 歸_ヲ 地

此の篇、新羅客を宴するものと、別時のものとす。長王は賓客を愛して、宛然一箇の孟嘗君なるか。靈臺は長王の作寶樓を指す。寶罌、罌は戲酬の禮に用ふる玉爵なり。且飲且彈ず。趙發青鸞舞、夏踊赤鱗魚、二句未考。柳條未吐綠、梅蕊已芳裾、裾は衣裾と成語して普通「スソ」なり、華裾は人の美服なぞに用ふるが、今芳裾を以て梅蕊に用ふるならざるを覺ゆ。正に是れ初春の景。芳辰賞回レ舒、芳辰を賞するに何の辭を以てして可なるや、舒ベ回レ舒となり。回は字音「ハ」にて、訓は「カタシ」と訓む。不可の二字を合成して以て一字と爲したるもの。

正五位下陰陽頭兼皇后宮亮大津連首 二一首【年六十六】

五言和^ス藤原大政遊^ニ吉野川之作^上【仍用^ニ前韻^一】

地是幽居宅
山惟帝者仁
潺湲浸^ス石^ヲ浪
雜沓應^ス琴^ニ鱗
靈懷對^シ林野^ニ
陶性在^ニ風煙^一
欲^{セリ}知^{ラント}權宴^ノ曲^ヲ
滿酌自忘^ル塵^ヲ

詩の和あるは久し。李陵蘇武以來なれば久しと謂ふ可し。此の篇前掲の夏身夏色。秋津秋氣の詩を和せしなり。蓋し日本に和韻の有る、此に始まる、地是、山、惟、山水を智と仁とに譬へて以て詩に表はさんとするは、此の時代一様の風潮とす。潺湲は水の流るる貌、水の音を主としての語なり。雜沓は雜遝^{サツタク}と同じ。衆多の貌。堂上で彈ずる琴聲に應じて、池中の魚族が集まるを言ふ。靈懷對林野、自然に對すれば、人は自から靈懷と爲る。塵懷とは爲らず。陶性、陶は化する、養ふなどの意義の字、吾が性を陶冶するは風煙に在り。城塵に在らず。歡宴、原作に於て吉野川に歡宴せし意味の句なりしならん。滿酌して忘るる所は、平日塵土の事に營營なるにあるなり。

案ずるに此の時代は唐の玄宗の開元に當る。所謂盛唐なり。盛唐詩人としての王維は、賈至朝大明宮詩を和し、韋主簿が溫泉寓目詩を和し、玄宗が雨中春望詩を和し、和詩は頗る多し。而かも皆意を和して、韻を和せず、韻を和し、韻を次するは中唐以後よりとす。元白皮陸の四家の集中、半は是れなり。然るに西土未だ和韻無き時、我に於て已に和韻あるは、文學に對する我が先賢の發明、大に歎

ずべきものあり。但一先(煙)の韻を以て十一眞に使用したるは、(禪)、を「イン」十一眞に用ひ、「エン」として一先に用ふるの類なり。唐律の正體には決して許さざるも、古の律に似たるの作、妨げざるべし。蓋し此の詩

(一) (二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

前半は正體、後半は拗體。此の作法は唐賢多あり。後賢學ぶも亦可。

五言春日於左僕射長王宅宴

日華臨水動
風景麗春墀
庭梅已含笑
門柳未成眉
琴樽宜此處
賓客有相追
飽德良爲醉
傳盞莫遲遲

日華臨水動、昭和二年の今日歌ふ句なれば、日本と民國と相互に水に臨み活動して居ると解する兒童もあらん。天智天皇の世、此の如き事無し。華は光と同じ。墀は石を敷きたる庭。貴人の家は昔も今も異ならず。庭梅の十字正に初春の景色。琴樽、賓客、琴と樽とは別物にて、賓と客は一物なり。客を主とすれば更に佳なり。琴と樽は既に備はる、賓と主人と相追逐して興趣を取るとなり。飽德十分に優待せられて、十分に酔ふ。此の詩の作法は古詩と見るべし、律と見るべからず。

贈正一位左大臣藤原朝臣總前 三首【年五十七】

五言七夕

帝里初涼至、
神衿翫早秋、
瓊筵振雅藻、
金閣啓良遊、
鳳駕飛雲路、
龍車越漢流、
欲知神仙會、
青女入瓊樓。

總前は一に房前に作る。鎌足の孫、史の第二子なり、官は參議、贈太政大臣。神衿は天皇なれば、宮中の七夕詩なり。瓊筵、金閣、鳳駕、龍車、美麗の句を以て七夕を塗澤す。而して牽牛と織女との問題には微塵も觸れず。結句に青女は七夕なればなり。此の篇唐律の正體に近し。七句のみ平仄失拈するも、餘は整正。

五言秋日於長王宅宴新羅客賦得難字

職貢梯航使、
從此及三韓、
岐路分袂易、
琴樽促膝難、
山中猿叫斷、
葉裏蟬音寒、
贈別無言語、
愁情幾萬端。

職貢梯航使は、二義を以て解するを得、一は長屋王が事なりと解す。一は三韓への使節と爲て赴く人なりと解す。長王は官式部卿、即ち式部大臣なり。式部大臣の職たる、禮儀、貢擧、考課、及び宮中の諸儀式、外國との交際上の事を掌る。是に由て之を觀れば、此の句長王を言ふと解するが可ならんと思ふなり。但從此の二字が起句に切ならずと考ふるも、強て文章と同じく解るの要なからん。三韓は馬韓、辰韓、辨韓なりとも、百濟、新羅、高麗なりとも、朝鮮と解すれば可なり。岐路分衿易、琴樽促膝難、難易の區別を敍べたのみならず、分衿易と云ふは、外國の使臣に對して、聊か禮を失したる語なりと思はる。分衿難と言ふて普通世辭を敍するの道なるを信ず。然りと雖も促膝所謂胸に城府を設けず、相互に胸襟を披ひて赤裸裸に交際することは難しとの意なれど、勢い分衿の方は易しと言はざるを得ず。作者も極めて推敲を練しものならん。猿叫斷、斷は斷絶の斷にあらず、叫の字の助語なり。雲斷とか、路斷とか、山斷とかの斷は斷絶なるも、今の句は北風吹斷天山草の句法と知るべし。山中には猿が叫び、葉裏には蟬音が寒し。

長王宅宴新羅客の詩總て十首、十人分韻して作りしものの如し。古詩の句を截て、以て韻に當てたるにや、或は一百七韻の中から取て籤を作り、以て作りしものなるや、此の時代韻書なければ總て明白ならず。白樂天の詩に素壁聯題分韻句の語ありて、此の遊戯も中唐以後盛んに興りしものにて、盛唐八九十年間は無き所とす。然るに日本に於て早く此の遊戯を作す。益す以て我が先賢の文學に於ける、一種の天分あることを歎ぜざるを得ざるなり。一も漢土、一も漢土と言つて、皇國が彼以上に才徳を具するを知らざる漢學者と稱する者あり。『日本紀』も讀まず、『大日本史』も讀まず、況や『萬葉』、況や『古事記』をや。但詩としては、絶大のもの所謂鯨魚碧海、巨刀摩天の物無く、蘭苔翡翠、綺靡柔妍の物多きは、海島の小國、其の想像が皆無なるを以てなり。『懷風藻』の一部、詩一百三十、人六十四、衣冠束帶、同一同様、竹林花園の中を往來して、氷海大山の險危を知らず。惜むべき所は、但其れ此に在るのみ。今分韻の字、風、稀、前、煙、流、時、秋、

難、の八人は得字とあり、二人は得字の記載なし。然れども悉く平韻にて仄韻は一首も無し、古人の句を分て賦したるにあらざること明白なり。蟲麻呂の繼北梁之芳韻人操二字、今北梁芳韻の何たるを知らざるを以て、判定を下す能はず。後賢の是正を望む者あり。

五言侍^レ宴^ス 一首

聖教越^ハ千禩^ヲ
英聲滿^ル九垓^ニ
無爲自無事
垂拱勿^{ナシ}勞塵^ニ
斜暉照蘭麗
和風扇^テ物新
花樹開^キ一嶺^ニ
絲柳飄^ス三春^ニ
錯繆殷湯網
續紛^{タリ}周池^ノ蘋
鼓^{シテ}遊^ヒ南浦^ニ
肆^{シテ}筵^ヲ樂^{シム}東濱^ニ

聖教、孔子の教にはあらず、我が國の聖主の教なり。千禩は千祀と同じ、支那上古年を祀と曰ふ。英聲は我代代天皇の英名なり。九垓は萬國なり、天下なり。無爲は無爲而天下治の無爲なり。無事は有事の反對、即ち天下治るなり。垂拱手を袖に入れ、強て手を下して勞塵すること勿し。今宮庭の様を見るに、斜暉即ち夕日は蘭を照して頗る麗、又宮庭を吹く和風は、總ての物を扇ぎて新。而して花は一嶺に満ち、柳は三春に飄る。錯繆は錯誤と同じ、「アヤマリタガフ」なり、殷湯は殷の湯王。前詩にも記してあるが、湯王出て見る、アミを四面に張り、而して之を祝する

者あるを、曰く天より降り、地より出づ、四方より來る者、皆吾が網に罹れ、湯が
曰く之を盡くせりと、乃ち其の三面を解て改め祝して曰く、左せんと欲せば左せ
よ、右せんと欲せば右せよ、命を用ひざる者は吾が網に入れ、諸侯之聞て曰く湯の
德至れりと、今此の詩、作者の意、湯王は聖人なりと雖も、我が無爲無事の世より
見れば、有爲の政にして、其れは錯繆であるとなり。續紛は物の多く聚り盛んなる
貌。周池蘋、蘋は「ウキ艸」、水中に蔓延し、綠葉白花なり。古代祭事に用ゆる艸
なり。續紛たるは美事なれども、我が無爲には及ばずとの底意味あるならん。表面
では、其の意有ること無し。鼓柷、肆筵、南浦、東濱、南浦にては舟を泛て樂し
み、東濱にては酒筵を肆て樂しむ。御宴に侍し。優遊たる狀を言ふ。

排律に似たるの古法、眞の排にあらず。是も古詩に屬するなり。